〈学生論文〉

『風立ちぬ』における夢の表象について
五十嵐季旺

テレビ番組のテロップにおける要約手法とアクセシビリティ～NHKニュース番組を題材として～
三重野 瞳

映画『男はつらいよ』シリーズにおける人気の持続性とブランドマネジメントに関する探索的研究
九鬼薫里子

Best Student Papers

『風立ちぬ』における夢の表象について

"On the Representation of Dreams in the film *The Wind Rises*"

立命館大学映像学部
五十嵐季旺 *IGARASHI, Tokio*

要旨

宮崎駿監督映画『風立ちぬ』(2013年)の主人公、堀越二郎は戦時下における飛行機の設計士である。しかし、二郎は自身の仕事と戦争の関係に対する葛藤を表面化することなく終始、飛行機作りに没頭する。二郎のそうした行動の理由は何か。

本論文はその問いへの解答を導き出すために、飛行機作りにまつわる言及と示唆が幾度となく見られる夢のシーンを、現実のシーンとの比較を交えつつ網羅的に分析したものである。その過程で、「美しい飛行機」を作るという願望を持つと同時に、人々を笑顔にしたいという抑圧された願望(「美しい夢」)を二郎が無意識に抱いていることを明らかにした。そしてそれら二つの願望が、それぞれ別次元の基準――美／醜と人間――に基づく願望であることを指摘した。

それらを踏まえて、二郎が戦時下において飛行機を作り続けるのは、人間に関する問題が無意識の水準では考慮されていたものの意識されていなかったからであると結論した。

Abstract

Jiro Horikoshi, the protagonist of Hayao Miyazaki's film *The Wind Rises* (2013), is an airplane designer in wartime. However, Jiro has devoted all of his attentions to making a plane without revealing the conflicts over the relation between his work and the war. What is the reason for Jiro's these actions?

In this paper, in order to get an answer to the question, I have analyzed the dream scenes, which have many references and suggestions related to airplane construction, comparing them with the real scenes in this film. During this process, while having a desire to create a "beautiful plane", it has revealed that Jiro unconsciously holds a suppressed desire to make people smile ("a beautiful dream"). And I have showed that the two desires rely on another dimensions of criteria – beauty/ugly and human beings.

Therefore, it was concluded that Jiro continued to make planes in wartime because problems with human beings were considered at the unconscious level but not conscious.

キーワード

宮崎駿／『風立ちぬ』／美しい飛行機／夢／抑圧

Keywords

Hayao Miyazaki／*The Wind Rises*／Beautiful Aircraft／Dream／Repression

序論

宮崎駿監督作品、『風立ちぬ』は2013年7月に公開された長編アニメーション映画である。その原作は、監督である宮崎自身が執筆し、2009年4月から2010年1月の間、月刊『モデルグラフィックス』の誌上で連載された同名の漫画『風立ちぬ★1』である。原作と映画を通して主人公に据えられている二郎には、実在した二人のモデルがいる。一人目が、第二次世界大戦中実際に使用された零式艦上戦闘機の生みの親である飛行機設計士、堀越二郎である。もう一人が、小説『風立ちぬ』や『菜穂子』などのサナトリウムを舞台にした作品で知られる文学者、堀辰雄である。映画の主人公、二郎は実在した彼ら二人を「ごちゃまぜにし★2」た人物とされている。映画『風立ちぬ』は、実在した人物と歴史上の出来事を題材に、物語自体は「完全なフィクション★3」として構成された作品である。

本作は、最終的な興行収入として、2013年に封切られた邦画の中では最大の約120億円をあげた。また、第37回日本アカデミー賞のアニメーション部門では最優秀作品賞を受賞し、さらに、アメリカでは第86回アカデミー賞長編アニメーション部門にノミネートされるなど、海外も含め広く注目を集めた作品である。

★1——この漫画は後に、宮崎駿『風立ちぬ 宮崎駿の妄想カムバック』、大日本絵画、2015年として単行本化されている。

★2——スタジオジブリ責任編集『THE ART OF THE WIND RISES』、徳間書店、2013年、8頁に掲載されている本作の企画書より引用。

★3——同上、8頁に掲載されている本作の企画書より引用。

1. 問題設定と分析方法

1.1. 問題設定

こうした成績をみると、本作が多くの観客や批評家に受け入れられたようにもみえる。確かに、「見終わった後、映画のキャッチコピー『生きねば。』が、胸に強く迫ってきました。（中略）自然に涙があふれました★4」いった映画に感銘を受けたという声が、観客の内から聞こえたのは事実だ。

しかし、必ずしも肯定的な感想や意見だけが大勢を占めていたわけではない。たとえば、「確かに泣けた。だが、何かえたいの知れぬ違和感が残った★5」など、映画に対して一部疑問を感じたという観客の声も聞こえた。また、戦争観や死生観の描き方が不十分だと述べた批評家もいた★6。さらには、海外、ベネチア国際映画祭でも「非常にナショナリスティック（国家主義的）な映画と受け取った★7」審査員がいたといわれる。

このように、本作は高評価を得た反面、物議を醸した作品としての側面もある。こうした物議の中心にあったのは、作品の面白さ云々や映像表現云々というよりは、むしろ主人公の二郎の行動についてであった。作中において、二郎は終始、飛行機作りに没頭する。しかし、二郎が生きたのは戦争の時代であり、したがって、作る飛行機は紛れもなく兵器である。また、二郎が会社に籠り飛行機作りをすることは、重い結核を押して結婚生活を送っていた妻、菜穂子を家で孤独にすることを意味していた。そうした状況下にあって二郎は、なぜ飛行機作りをやめないのか、また、菜穂子を独り家に残してまで飛行機作りに没頭するのか。こうした点が主に多くの物議の論点となり、これまでに様々な意見が出されてきた。

だが、これらの問題の中でもとりわけ、二郎が作る飛行機と戦争の関係についての議論において、意見は二分した。その詳細は第二章で確認することになるが、ここで端的にいうと、二郎を肯定するか、否定するかという点で二分した議論が

★4——木下ゆう子「（声）宮崎アニメ「風立ちぬ」に感銘」、『朝日新聞』オピニオン2、2013年7月14日朝刊、朝日新聞社、8頁。

★5——井上真実「（声）若い世代　3本の映画で戦争を考えた」、『朝日新聞』オピニオン2、2013年9月7日朝刊、朝日新聞社、12頁。

★6——垣井道弘「SPECIAL REVIEW『風立ちぬ』鑑賞ガイド」、『キネマ旬報　2013年8月上旬号No.1642』、株式会社キネマ旬報、67頁。

★7——安斎耕一「伝統壊す勇気を評価「風立ちぬ」意見二分　坂本龍一が語るベネチア映画祭」、『朝日新聞』文化芸能、2013年10月18日夕刊、朝日新聞社、3頁における坂本龍一の発言より引用。

多く見られた。しかし、二郎が戦闘機を作り続ける、その理由については深く議論がなされているとは言い難い。こうした現状を踏まえて、本論では、二郎の善悪に目を向けるのではなく、二郎の行動の理由に重点を置き、問題とする。すなわち、戦争の時代において二郎が飛行機を作り続けるのはなぜか、それが本論の問いである。

この問題に取り組むにあたって、本論では夢のシーンに注目したい。なぜなら、夢のシーンは、二郎が飛行機を作る動機を得たとみられるシーンでもあり、飛行機と戦争の関わりについて度々言及されるシーンだからである。また、本映画は実質的に夢のシーンから始まり夢のシーンで終わり映画でもあり、作中においても、二郎は幾度も夢を見る。さらに、夢の中からは、二郎の無意識が読み取れることも充分に期待される。これらのことから、本論では、夢のシーンを網羅的に分析することによって、これまで見落とされてきた解釈の可能性を示し得ると考えられる。

したがって、本論の目的は、夢のシーンを網羅的に分析することで、戦争の時代において二郎が飛行機を作り続ける理由を明らかにすることである、とまとめられる。

1.2. 分析方法と論構成

本節では、つぎの三つのことを提示する。すなわち、本論が分析対象とする夢のシーン一覧の提示、その分析方法の提示、そして論構成の提示である。

まず、本論が分析対象として扱う夢のシーンを一覧化する。本論では、物語世界内で二郎が実際に見ていることが明示されている非現実的なシーンを、夢のシーンとして取り扱こととする。したがって、二郎が目を覚ましながらに見る非現実的なシーン、すなわち白日夢のシーンも、本論では夢のシーンとして数えることとする。しかし、飛行機の設計シーンや飛行機の構造を説明する際に映し出される非現実的なシーンについては、物語世界内ではなく、物語世界外の観客に向かって提示されたシーンであると考えられるため、ここでは分析の対象外とする。この基準にしたがって、本論では以下の七つのシーンを扱うこととする。以下では、便宜上、各シーンの名前を記しながら、夢のシーンの一覧を示す。本論では以後、ここで割り当てるシーン名で、各シーンを記すこととする。

一つ目のシーンは「墜落の夢」である。これは、映画の冒頭、少年時代の二郎が自宅の蚊帳の中で眠りながら見る夢である。夢の中では、二郎が自宅の屋根の上から小さな飛行機に乗って飛行し、後に墜落する。それと同時に、現実世界の二郎は蚊帳の中で眼を覚ます。

二つ目のシーンは「夢の王国①」である。少年時代の二郎が、妹の加代と共に屋根の上で星空を見上げているときに、この夢を見る。夢の中で、二郎はカプローニと出会う。そして、現実世界の部屋の中で母親に起こされることによって、二郎は目を覚ます。なお、このときの夢の中の舞台である草原が、ラストシーンの夢において反復して現れた際、カプローニがその草原を指して「夢の王国だ」と言っていることから、本論ではこのシーンを「夢の王国①」と名付けた。

三つ目のシーンは「関東大震災時の白日夢」である。この白日夢は、大学生になった二郎が関東大震災に遭遇したときに見るものである。このシーンでは、震災時に足に怪我を負ったお絹を背負いながら、二郎は上空の雲の中に一瞬、飛行機の姿を見る。

四つ目のシーンは「Ca.60の試験飛行の白日夢」である。関東大震災の際、大学の前で本庄と煙草を吸っていた二郎は、現実世界のジャンニ・カプローニの写

真が載った絵葉書を拾う。そして、この白日夢の中でCa.60の試験飛行を行うカプローニと、二郎は現実世界から会話をする。

五つ目のシーンは「G.38の墜落の夢」である。この夢は、三菱重工業に就職し、飛行機設計士になった二郎が見る夢である。視察先のドイツで、ホテルのベッドの上に眠りながら、二郎はこの夢を見る。夢の中では、爆撃機型に改造されたG.38が墜落する姿を、二郎は見る。この夢のシーンは、現実世界にいる本庄が「二郎。風呂に入れ」と呼びかける場面に画面が切り替わることで、一度途切れる。

六つ目は「引退飛行の夢」である。この夢は、「G.38の墜落の夢」の続きであると見られる。この夢の中では、一人汽車に乗っていた二郎のもとに突然カプローニが現れる。そしてその後、二郎はカプローニの引退飛行に帯同する。その夢の世界から、現実世界の日本の港町に画面が切り替わることで、この夢のシーンは終わる。

七つ目は「夢の王国②」である。この夢は、映画の最終盤、飛行機の残骸の中を歩く二郎の姿が映るところから始まる。この夢の中の草原で、二郎は、カプローニと菜穂子に会い、会話をする。その後、「堀越二郎／堀辰雄に敬意を込めて」というクレジット画面に至ることで、この夢のシーンは物語と共に終りを迎える。

つぎに、シーンの分析方法を提示する。本論文では、主に登場人物の台詞を中心に分析していく。したがって、必要があれば、シーンを台本型で記述することもある。形式的には、シーンごとに、まずシーンのあらすじを示してから分析していくこととする。但し、長いシーンの場合は、あらすじを途中で区切りながら分析していく。また、夢の中の内容をどう分析するか、という問題については第三章第三節において詳細を記述する。

最後に、論構成を提示する。続く第二章では、先行研究の整理を行い、問題点を指摘し未解決な点を見出すことで、本論の方向が定められる。第三章では、二郎が少年期に見た二つの夢を主に分析し、それを頼りに、二郎の意識的な願望と無意識的な願望が明確にされることになる。第四章では、二郎が大人になってから見る、残る五つの夢の分析を通して、実際に飛行機を作る二郎の意識と無意識に注目しながら、二郎が飛行機を作っている際の無意識の変化が明らかになる。以上の分析から、戦争の時代において二郎が飛行機を作り続ける理由は何か、という本論の問いに答えることになる。

2. 先行研究の整理

本章では、これまでの論評や解釈が如何なるものであるかを確認し、本論が進むべき方向を定めておこう。まず、映画評論家の森直人の評論を確認する。森の観点によると、映画で描かれた二郎の半生はつぎのように要約される。

> 少年期からの美しい飛行機を作りたいという彼のピュアな夢は、やがて戦争の荒波に呑（の）みこまれ、兵器開発というネガティブな政治性を帯びてしまう。それでも二郎は愚痴すら口にせず、軍需産業に携わるサラリーマン技術者として、ただ日々淡々と仕事を続けていく。最愛の女性・菜穂子を守りながら★8。

★8――森直人「（プレミアムシート）「風立ちぬ」ちっぽけな人間、静かに肯定」、『朝日新聞』夕刊be金曜1面、2013年7月26日夕刊、朝日新聞社、4頁。

森は、こうした「身の丈の生活に徹するノンポリの二郎[★9]」が、「自分の孕む（はら）む罪や矛盾について、表には葛藤を見せない[★10]」点こそ、評価の分かれ目になるだろうとしている。その上で、「彼の寡黙を責める矛先は、現代社会に生きていくだけで環境破壊やグローバリズムの歪み（ゆがみ）に加担してしまう、観客の我々自身にも跳ね返ってくることは自覚すべきだ[★11]」と論じ、「宮崎駿は、時代に翻弄（ほんろう）されながら、清濁併せ呑んで生きていかざるを得ないちっぽけな人間を、等身大の目線と無常観で静かに肯定した[★12]」と評価している。

しかし、森の観点には、まずひとつの問題点があるだろう。それは、二郎が戦闘機を作ることを時代の責任とみていることである。確かに、二郎が生きた時代を戦争が包んでいたことは、当人にとってほとんど仕方がなかったことだろう。けれども、誰もが了解しうるように、そうした戦争の時代にあってなお、二郎は紛れもなく自らの意思で飛行機作りを継続するのである。逆にいうと、二郎には飛行機作りをやめる選択も可能だったのである。したがって、そのことまでを含めて、「時代に翻弄（ほんろう）された[★13]」ということはできない。

つぎに、森の論評の中で注意してみておくべき点は、二郎の内に戦闘機を作ることへの明確な葛藤があったとしていることである。つまりは、「自分の孕む（はら）む罪や矛盾について、表には葛藤を見せない[★14]」だけなのであって、二郎の内には明確な葛藤があったと、森は捉えている。このことは、すなわち、二郎が作中で作る戦闘機（九試単座）は、二郎にとって完全に理想の飛行機ではなかったということを意味することになる。しかし、少なくとも作っている過程においては、その戦闘機は二郎にとって理想の飛行機だったのではないだろうか。というのも、仮にそれを二郎の理想の飛行機ではなかったとすると、二郎が菜穂子との生活を顧みないほどに、飛行機作りに没頭することの説明が困難である。

森とは反対に、二郎のことを批判している脚本家の荒井晴彦は、対談の場において、つぎのように発言している。まず、二郎が結核を患う菜穂子の隣で煙草を吸うシーンを問題にあげた荒井は、「自分のタバコの煙の行き先に関して想像力がないのと同じで、自分の美しい飛行機の行き先にも何の想像力もない[★15]」と述べている。そして、その上で、仮に葛藤が描かれていたとしても、零戦を作ったという事実は事実であるため「赦すことにはならない[★16]」と批判している。

本論は、先にも述べたように、二郎の是非を問うものではない。したがって、注目すべき点は、両者の意見が、二郎の内に葛藤があったのか否かという点で割れているということである。では、荒井のいうように、二郎には想像力が欠けており、そのため戦闘機を作ることへの葛藤がなかったのだ、と見ることはできるだろうか。もし、そうだとするならば、二郎が飛行機を作り続ける理由を説明し得ることになる。しかし、二郎に想像力がないために、全く葛藤していなかったと考えることはできないだろう。なぜなら、本論が注目する、二郎の夢のシーンにおいては、実際に「飛行機は殺戮と破壊の道具になる」という台詞が少なくとも存在するためである。

要するに、二郎の内に明確な葛藤があったとすると、菜穂子を家に置き去りにしてまで戦闘機作りに没頭する理由ができない。他方で、二郎が自分の戦闘機の行く末を想像しないために、完全に葛藤がなかったとみなすことも困難である。そうすると、戦争の時代において二郎が飛行機を作り続けた理由は、こういった観点からは解明されない問題であると想定される。したがって、本論では、二郎には明確な葛藤があった、あるいは、飛行機の行く末を想像していなかったがために完全に葛藤がなかった、といったものとは異なる解答が求められる。

★9——森直人「（プレミアムシート）「風立ちぬ」ちっぽけな人間、静かに肯定」、『朝日新聞』夕刊be金曜1面、2013年7月26日夕刊、朝日新聞社、4頁。

★10——同上、4頁。

★11——同上、4頁。

★12——同上、4頁。

★13——同上、4頁。

★14——同上、4頁。

★15——荒井晴彦、西岡琢也、晏妮「映画『風立ちぬ』の中心と周縁 そこに顕れる問題諸々を突く」、『映画芸術』、445号、編集プロダクション映芸、2013年、26頁。

★16——同上、26頁。

3.「美しい夢」と「美しい飛行機」

3.1. 墜落の夢分析

本章で分析する夢のシーンは、二郎の少年期、飛行機の設計家を志すまでの一連の流れを描いた墜落の夢、及び夢の王国①である。本節ではまず、墜落の夢を分析していく。

墜落の夢のあらすじをまとめるとつぎのようになる。明け方、自宅の屋根から小さな飛行機で飛び立った二郎は、眼鏡を掛けないまま飛行を楽しんでいる。田んぼを通り過ぎ、川の上に差し掛かると、二郎は水面すれすれに低空飛行する。すると、二郎を見つけた多くの女性たちが、地上から笑顔で二郎に手を振る。それを見て、二郎も笑顔で手を振り返す。その最中、雲の中から、鉄十字がペイントされ、いくつのも「爆弾虫★17」をぶら下げたツェッペリンが現れる。それを目にした二郎が、ゴーグルを掛けると、なぜか眼鏡まで一緒に顔に掛かってしまう。それにより突然視界が歪んだことに驚いた二郎は、ゴーグルと眼鏡を力強く引きむしろうとする。結果、ゴーグルを外すことはできたものの、しかし、眼鏡だけは顔からぴったりと離れずに、気が付いたときには急接近する「爆弾虫」と激突し、粉砕された飛行機と共に二郎は墜落していく。

★17——宮崎駿『スタジオジブリ絵コンテ全集19 風立ちぬ』、徳間書店、2013年、24頁において、ツェッペリンにぶら下がった爆弾のような黒い物体は「爆弾虫」と呼ばれていることから、本論文でもその呼び名を用いることとする。

このシーンからまず考えられることは、この夢のシーンの後半部分は宮崎の創作によるものだということである。というのは、この夢のシーンの前半おける大部分の描写は、実在した堀越二郎が実際に見たと回想している夢から着想が得られていると推測されるためである。実在の堀越二郎は自伝、『零戦★18』の中で、少年期の夢についてつぎのように回想している。

★18——堀越二郎『零戦 その誕生と栄光の記録』、角川書店、2012年（原著1970年）。

> 第一次世界大戦がはじまり、飛行機が戦争に使われだしたころは、私はまだ小学生であった。新聞の欧州大戦の記事、とくに、西部戦線での空中戦の記事や、飛行機を種とした物語を満載した雑誌「飛行少年」「武侠世界」などを読みふけった。とくに西部戦線の花形だったニューポール、スパッド、フォッカー、ソッピーズなど、ヨーロッパ各国の新鋭戦闘機の名は、私の幼い血をわきたたせた。また、自分が作った小さい飛行機に乗り、野こえ、山こえ、低空飛行を楽しんでいる夢をよく見たものである★19。

★19——同上、20頁。

実在の堀越二郎が見たと記しているこうした夢が、映画で描かれる墜落の夢の前半部分のもとになったということは、間違いないといえるだろう。何よりもまず、「自分が作った小さい飛行機に乗り、野こえ、山こえ、低空飛行を楽しんでいる夢をよく見たものである★20」という記述は、映画で二郎が飛行を楽しんでいる場面とおおよそ合致している。さらに、映画からは、二郎がこの夢を見ている時期が第一次世界大戦末期であることも分かる。夢の中に登場する、船体にプロイセンの鉄十字がペイントされたツェッペリンは、歴史上では「当初は旅客や大量輸送を目的にしたが、1914年（大正3年）に第一次世界大戦が始まるや、最新鋭の武器として利用され★21」た飛行船である。また、この夢から目覚めた二郎が、学校で先生から手渡される飛行機雑誌には「FEBRUARY 14,1918」と書いてあり、第一次世界大戦末期に発刊されたものであることが分かる。

★20——同上、20頁。

★21——スタジオジブリ責任編集、前掲書、27頁。

この夢の前半が、実在の堀越二郎の回想に基づいたものだとすると、墜落の夢の後半、ツェッペリンが現れて二郎が墜落するまでの描写は、宮崎による創作で

あるということがいえる。また、この夢の前半における大勢の女性たちに手を振るという描写も宮崎の創作だと分かる。実際、実在の堀越二郎による『零戦』の中には、夢の中で大勢の女性たちを見たという記述、墜落する夢を見たという記述はない。

このシーンについては、本章第三節において再度触れることになるが、ひとまずは以上の点だけ補足的に念頭に置いて、次の夢のシーンをみていこう。

3.2. 夢の王国①分析

夢の王国①の前半は、つぎのように要約できる。夢の世界に入る直前、現実世界における二郎は自分の視力を鍛えるため、屋根の上から裸眼で夜空を見ようとする。そこに、妹の加代がやって来て、空には流れ星が見えると教える。目を凝らしてそれを見ようとする二郎だが、しかし、視界が完全にぼやけてしまうためにその流れ星を見ることができない。その最中、二郎は突如として夢の世界へ入り込む。夢の世界で、眼鏡を掛けながら草原に佇む二郎は、飛行機に乗って飛んでくるカプローニと出会う。カプローニは二郎を見つけると、飛行機から降り、二郎のもとへ近づく。そして、「夢と夢とがくっついた」ことを確認し合った二人は握手を交わした後、茜雲に覆われる空の中を飛んで行く爆撃機、Ca.3とCa.4の一群を見送る。その一群の後ろ姿を見ながらカプローニは、「あの半分も戻って来まい。敵の街を焼きに行くのだ」と二郎に語る。それを聞いた二郎は、Ca.3とCa.4による空襲で燃え盛る街を見る。

ここでは、夢の中に現れる雲に注目できる。夢のシーンにおいて、これからも度々現れることになる茜雲は、飛行機が戦争の道具として用いられることといった飛行機の持つ破壊性を象徴する存在だと考えられる。この茜雲は、二郎とカプローニが飛行機の破壊性について会話をする場面には必ず現れるからである。

一回目は、ここで分析している夢の王国①で、爆撃機であるCa.3とCa.4を見送るときである。二回目は、後に分析することになる引退飛行の夢において、カプローニが飛行機と戦争の関係を語るときである。三回目は、夢の王国②において、二郎とカプローニが零戦を見送るときである。こうした事例のほかに、宮崎自身も空（雲）が「大きな意味をもつ★22」ことを明言している。

この茜雲についても、再度言及することになるが、現時点では飛行機の破壊性を象徴するものであるということを確認するにとどめておく。遠い空へ向かって飛んでいく爆撃機の一群を見送った二人は、つぎの会話をする（分析の対象箇所を中心に台本型で要約する）。

カプローニ　「だが、戦争はじき終わる」
カプローニは振り返り、機体に「TRANSPORT」と書かれたCa.48を草原に呼び寄せる。Ca.48が降り立つときには、茜雲に覆われていた空は一変して青空に変わっている。すると、二郎の横に立っていたはずのカプローニが、突然Ca.48の中から顔を出し、二郎を誘う。

カプローニ　「乗りたまえ。日本の少年」
二郎は、カプローニの促しに応えて、Ca.48に乗り込もうと梯を上る。

カプローニ　「これは私の夢だ。戦争が終わったらこいつを作るのだ」
二郎が乗り込むと、カプローニの声と共にCa.48が飛び立つ。

カプローニ　「飛ぶぞ」

★22――半藤一利、宮崎駿『半藤一利と宮崎駿の腰ぬけ愛国談義』、文藝春秋、2013年、183頁。

Ca.48の内部には客席が設置され、豪華な装飾が施されている。

カプローニ　「どうだね。豪華だろうが。爆弾の代わりにお客を乗せるのだ」

その後、二人はCa.48の翼の上に移動する。二人はその翼の際から下を覗き込み、湖から飛び上がろうとしているCa.60の姿を見る。飛び立ったCa.60の窓からは老若男女、大勢の乗客が笑顔を覗かせている。二人はこの飛行機に向かって手を振る。

カプローニ　「どうかね、美しかろう」

二郎　「はい。壮麗です」

カプローニ　「百人の客を乗せて大西洋を横断するのだ」

すると、二郎は突然、カプローニに質問を繰り出す。

二郎　「カプローニさん、質問があります。近眼でも飛行機の設計はできますか。僕は近眼で飛行機の設計ができません」それを聞いたカプローニは笑いながら答える。

カプローニ　「いいかね、日本の少年よ。私は飛行機の操縦はしない。いや、できない。はははははは。パイロットに向いている人間は他にたくさんいる。私は飛行機を作る人間だ。設計家だ」

二郎　「はい」

カプローニ　「いいかね、日本の少年よ。飛行機は戦争の道具でも、商売の手立てでもないのだ。飛行機は美しい夢だ。設計家は夢に形を与えるのだ」

二郎　「はい」

カプローニ　「さらばだ。また会おう」

母親の声によって、二郎は部屋の畳の上で目を覚ます。そして、二郎は母親に決意を告げる。

二郎　「母さん。僕は飛行機の設計家になります」

二郎の母親　「そう、素敵な夢ですね」

二郎　「飛行機は美しい夢だとその方は言いました。僕は美しい飛行機を作りたい」

このシーンからは、重要なことが読み取れるだろう。それは、結論からいうと、カプローニの言う「美しい夢」と二郎の言う「美しい飛行機」は、それぞれ違うことを意味しているのではないだろうかということである。どういうことか。

まず、カプローニの言う「美しい夢」とは何を意味するか、をその台詞を中心にみていこう。カプローニは爆撃機の群れを見送った後、草原に降り立ったCa.48に乗り込むと、「これは私の夢だ。戦争が終わったらこいつを作るのだ」、「爆弾の代わりにお客を乗せるのだ」と二郎に語る。この台詞は、爆弾ではなく客を乗せることこそがカプローニの夢であると理解できる。つぎに、カプローニは飛び立ったCa.60を指して「どうかね、美しかろう」と問い、「百人の客を乗せて大西洋を横断するのだ」と言う。ここで注目すべきは、Ca.60に乗る大勢の客は、全員窓から笑顔を覗かせていることである。つまり、飛行機に乗った客が笑顔で飛行を楽しむ、その姿を指してカプローニが「美しかろう」と言っているのかもしれない。

以上の点を踏まえて、この夢の終盤に口にされる「飛行機は戦争の道具でも商売の手立てでもないのだ。飛行機は美しい夢だ」という台詞を聞くと、「美しい夢」の意味するところが明確になってくる。すなわち、このときカプローニは「戦争の道具」／「美しい夢」、あるいは、「商売の手立て」／「美しい夢」という対

比で「美しい夢」という表現を使っている。先程みたように、カプローニによって「夢」と表現されたことは爆弾ではなく客を乗せることであり、「美しい」と表現されたのは飛行機に乗る客が笑顔で楽しむ姿であると考えられた。そうした様子は、「戦争」や「商売」という形で飛行機が用いられる場合とは、飛行機に乗る人々が笑顔であるか否かという点において、対照をなすものだろう。であるならば、ここではカプローニが、飛行機に乗る人々、すなわち「人間」がどうであるか、を基準にしているということになる。そして、「人間」の笑顔を伴う飛行、あるいは「人間」の笑顔そのものを、カプローニは「美しい夢」と表現しているのだと考えられる。

言い換えれば、「飛行機は戦争の道具でも商売の手立てでもないのだ。飛行機は美しい夢だ」という言葉は、つぎのように理解できる。すなわち、飛行機は戦争や商売のためのものではなく、「人間」の笑顔と共に飛行するためのもの、あるいは「人間」を笑顔にするためのものだ、という理解である。また、カプローニがその後、「夢に形を与えるのだ」と言っていることから、カプローニは、「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔にしたい、という願望を抱いていると考えられる。

他方、二郎の言う「美しい飛行機」の意味するものは何か。このシーンにおいては、「飛行機は美しい夢だとその方は言いました。僕は美しい飛行機を作りたい」と、二郎が母親に告げるところで口にされる。「美しい夢」が「人間」を指す言葉であろうことは既に確認した。しかし、二郎は、その「美しい夢」の「美しい」の部分だけを残して「美しい飛行機」と言い直し、それを作りたいのだと言う。「美しい夢」を「美しい飛行機」と言い直したとき、その「美しい」とされるのは物としての飛行機、すなわち飛行機自体ということになる。飛行機自体が「美しい」として表現されるならば、その「美しい」が指すものは形状の「美しさ」ということになるだろう。その場合、「美しい飛行機」の対極にあるものは主に「醜い飛行機」といったものになる。したがって、二郎は、美／醜という飛行機の形状を基準にして飛行機のことを考えていることになる。

二郎が、「美しい夢」の指すところの「人間」ではなく、飛行機自体を基準にしている、ということはCa.60を見ながら二人が交わす会話が物語っている。このとき、二人は飛び立ったCa.60に対して、たしかに同様に手を振っている。このことも含めて、カプローニが、実質的には「人間」を「見」て、「美しかろう」と言ったのだと考えられるのである。しかし、カプローニのその言葉に対して、二郎は「はい、壮麗です」と答えている。この「壮麗」という言葉は、大きさを讃える意味合いを含んでいる。だが、飛行機に乗る「人間」を指して大きさを讃えるということは、差し当たりありえない。したがって、この「壮麗」という言葉は、二郎が実質的に「見」ているものが「人間」ではなく、飛行機自体であることを示しているといえる。

こうして、二人が「見」ているものが違うということを踏まえれば、二郎が「美しい夢」を「美しい飛行機」と言い直したのは、単なる偶然や取り違えではないと分かる。もちろん、カプローニの「美しい夢だ」という言葉を受けて、二郎が「美しい飛行機を作りたい」と言っているは確かだろう。しかし、「人間」を指した「美しい夢」の意味を、飛行機自体を「見」ていた二郎は、理解していないのだと考えられる。それゆえ、ここで二郎が「美しい飛行機」と言い直すという結果は、生まれるべくして生まれたのだといえる。言い直すというよりは、二郎はここで新しく「美しい飛行機」という言葉を作ったというべきだろう。つまり、一見、カプローニから目標を与えられたように見えた二郎は、実際のところ独自

に目標を定めていることになる。

こうした意味の相違から考えられる問題点は、飛行機の美／醜を基準とする「美しい飛行機」と、「人間」がどうであるかを基準とする「美しい夢」の両者は、相互に直接関係し合わないもの同士であること、すなわち、それぞれ異なる次元に位置する考えだということである。換言すれば、二郎が言う「美しい飛行機」は、たとえそれが旅客機といった「人間」の笑顔を生む飛行機であっても、爆撃機といった「人間」の不幸を招く飛行機であっても、成り立ち得るということである。そうすると、もし、「人間」のことを考えず、「美しい飛行機」という飛行機の形状だけに目を呉れていた場合、「人間」の存在は無視されることになる。

3.3. 二郎とカプローニの関係

前節では、「美しい夢」と「美しい飛行機」の意味の違い、そしてそれぞれが指すものの違いを論じた。ここでは、ある根本的かつ重要な問題を考える必要がある。それは、二郎とカプローニは果たしてどういう関係なのか、という問題である。前節では、二郎とカプローニが他者同士であるかのように論じてきた。しかし、他方で、カプローニは二郎の頭の中に在る人物であることは紛れもない事実である。

このことは、カプローニが二郎の夢の中にしか現れないという事実からだけではなく、二郎が現実世界の中で見たもの聞いたものをカプローニが反映しているという事実からも分かる。たとえば、カプローニが夢の王国①で突如として現れたのは、二郎がこの夢を見る前に、飛行機雑誌でジャンニ・カプローニという人物を知ったからである。また、後に分析することになるCa.60の試験飛行の白日夢では、カプローニが不意に「Le vent se lève, il faut tenter de vivre 」とポール・ヴァレーリーの詩の一編を口にする。この台詞が発せられたのは、このシーンの前、二郎が汽車の中で菜穂子と交わした詩の掛け合いがあったからである（少女時代の菜穂子が「Le vent se lève ?」と問いかけると、二郎は「il faut tenter de vivre」と返すという一幕があった）。このように、カプローニという存在、あるいはその言動に、二郎が現実世界において見たもの聞いたものの要素が反映されている事例が、しばしば見て取れるのである。したがって、カプローニが飽くまでも二郎の頭の中の人物であり、二郎と切り離して考えることはできない存在であるという点については疑う余地がない。

けれども、前節で見てきたように、二人の「美しい」という言葉には意味の違いがあると思われ、二人が「見」ていた先にも「人間」と飛行機自体という点で相違が認められた。これら二つの違いをもう一度、注意深くみてみよう。まず、カプローニが「美しい夢」と口にしたのは二郎の夢の中である。他方、二郎が「美しい夢」を「美しい飛行機」と言い直したのは現実世界においてである。つまり、厳密にいえば、現実世界の二郎がこのとき「飛行機は美しい夢だとその方は言いました」と言っているのは、見た夢の内容を、意識の中で思い出しながら言っているのである。そして、その思い出している「美しい夢」という言葉を、現実世界における二郎は「美しい飛行機」と言い直しているのである。

夢について考える手引きとして、ここではジグムント・フロイトの論を参照しよう。フロイトはまず、「夢の物語るものを夢の顕在内容★23（傍点原文）」とし、その夢について「いろいろと思い浮かぶことを追求して到達できるはずの隠されているものを夢の潜在思想★24（傍点原文）」として区別している★25。つまり、夢を見た張本人が夢として実際に意識しているものは「夢の顕在内容」であり、夢を見た張本人は、そのままでは「夢の潜在思想」を意識することはないのだとい

★23――ジグムント・フロイト、『精神分析入門（上）』、高橋義孝・下坂幸三訳、新潮文庫、1977年（原著1917年）、196頁。

★24――同上、196頁。

★25――同上、183－204頁を参照。

う。その理由をフロイトは、「夢の潜在思想」を「夢の顕在内容」に置き換える働きである「夢の作業★26」があるためだと論じている★27。すなわち、「夢の潜在思想」が「夢の作業」によって「夢の顕在内容」へと置き換わる間に、「夢の歪曲★28」が生じるため、結果的に夢をみる張本人は「夢の潜在思想」を意識することはないのだという。また、「夢の歪曲」の主な原因は、「抑圧★29」された願望に対抗する★30「夢の検閲★31」にあるという★32。このことを平たく理解するならば、無意識的な願望が意識されない理由は、その願望を「抑圧」するもうひとつの無意識があるからだということになる。

これらのことを、本論へはどうのように適用できるだろうか。フロイトの論考にしたがえば、画面に映し出されている夢の中の光景全ては「夢の顕在内容」であると考えられる。すなわち、カプローニの存在とその言動、またその他の夢の中の光景全ては、二郎の「夢の潜在思想」が置き換えられたものであり、またそもそも夢であるため、二郎の無意識が作りだした光景であると考えられる。であるならば、カプローニの言う「美しい夢」という願望、すなわち、「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔したいという願望も、二郎の無意識が作りだした夢の中で表されている願望であると考えられる。

本来であれば、二郎の無意識が作りだした「夢の顕在内容」の要素であるカプローニ自体が、既に「夢の潜在思想」が置き換わったものであると考える必要があろう。その点を念頭に置きつつも、この場合、つぎのようにも考えることができるかもしれない。すなわち、夢の中にいるカプローニによって表された「美しい夢」という願望は、現実世界にいる二郎においては「美しい飛行機を作りたい」という別の願望として言い換えられていることから、二郎には意識されていない、無意識的な願望であると仮定できるだろう。

このように、「美しい夢」という願望が二郎の無意識的な願望であるとするならば、その願望は、二郎の無意識によって「抑圧」された願望であるということになる。であれば、二郎の無意識においては、「美しい夢」という願望を「抑圧」する側の意向も同時に存在することになる。そうすると、カプローニという存在は、二郎の無意識的な願望を表す存在であると同時に、二郎の無意識によって「抑圧」される願望を表している存在であると仮定できる。

この仮定を裏付けるには、二郎が無意識的に、「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔にしたいという願望を持っていることを明らかにする必要がある。この裏付けの作業は本章第五節に譲り、ここでは、夢の中におけるもう一人の登場人物、「二郎★33」について考えておきたい。

夢の中の世界における「二郎」も、カプローニと同様に二郎の無意識によるため、二郎の意識とは関係のない言動を取っているとも考えられる。その点を念頭に置きながらも、夢の中にいる「二郎」の存在については、夢の中のその他の要素以上に注意深く見ておくことができよう。なぜなら、夢の中における「二郎」と現実世界における二郎という両者には、飛行機自体に目を向けているという点で共通点があるためである。前節でのシーン分析の結果も参照しつつ、ここではその点を確認しよう。

まず、現実世界における二郎からみていこう。二郎は、夢の王国①が明けた直後に、現実世界の中で「美しい飛行機を作りたい」と言っていた。前述したように、この「美しい飛行機」という言葉は、飛行機自体の形状を指すものであると考えられる。また、ここでの「美しい」が、確実に飛行機自体の形状について言っているということは、現実世界において二郎が「美しい」と口にする、つぎの三つの場面からも確実であるといえる。

★26――ジグムント・フロイト、『精神分析入門（上）』、高橋義孝・下坂幸三訳、新潮文庫、1977年（原著1917年）、284頁。

★27――同上、283－305を参照。

★28――同上、284頁。

★29――同上、365頁。

★30――同上、365頁。

★31――同上、230頁。

★32――同上、224－246頁を参照。

★33――以降、夢の中にいる二郎は、一重鍵括弧で括り「二郎」と記す。

映画内の時系列では前後することになるが、ここではそれらの場面を確認しておこう。一つ目は、大学生になった二郎が鯖の骨を見ながら「美しいだろう。素晴らしい曲線だと思わないか」と本庄に言う場面である。二郎はこの後、「鯖の骨と同じ翼断面がNACAの規格にあるぞ」と言うことになる。つまり、このとき鯖の骨を見て「美しい」と言っている二郎は、その骨自体ではなく、実質的には飛行機の形状に関する意味で「美しい」と言っているのである。二つ目は、設計士になってドイツを訪れていた二郎が、ユンカース社の飛行機倉庫に収められていたF.13を見ながら、「美しい」と一人で呟く場面である。このときの二郎が、飛行機に対して「美しい」と言っていることは見ての通りである。三つ目は、その飛行機倉庫を訪れた日の夜、二郎がホテルに設置されたラジエーターを指しながら「これもユンカース製かな。今日見た飛行機と似ていると思わないか。美しいよ」と言う場面である。ここで二郎が指しているラジエーターは、ポール状のものが等間隔に並べられたラジエーターである。そのラジエーターの外観と、二郎が「美しい」と言ったF.13の波鈑外鈑には、形状において類似が認められる。つまり、このときの「美しい」も飛行機の形状に関連する意味で使われている。

以上の三つの場面では、二郎はいずれも、飛行機自体の形状を指して、あるいはその形状に関して「美しい」と言っていることが分かった。こうした「美しい」という言葉の使い方からも、二郎が夢の王国①から覚めた際に言った「美しい飛行機を作りたい」という言葉の「美しい」が、飛行機自体を指しているのだといえる。

そして、重要なことは、夢の中の「二郎」も飛行機自体を「見」ていたという点である。このことについては、「二郎」がCa.60を見て「壮麗です」と口にしていたことから既に示した。要するに、夢の中の「二郎」も、現実世界の二郎も、飛行機自体に主眼を置いているという点においては共通点が見て取れるのである。

したがって、夢の中の光景は飽くまでも二郎の無意識による光景であるという点ついては留意しつつも、本論では、夢の中の「二郎」と現実世界における二郎との共通点を鑑みて、夢の中の「二郎」は、二郎の意識に比較的近しい存在ではないかと想定してみていくことができよう。

3.4.「美しい夢」が「抑圧」される理由

前節では、「美しい夢」、つまり「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔にしたいという願望は、二郎の無意識的な願望であるとして仮定した。そこで、本節ではその仮定に基づき、つぎのことを考えておきたい。すなわち、「美しい夢」はなぜ、二郎において「抑圧」された願望なのかということである。ここではその原因を推測していくことになる。まずその結論を示すと、二郎の無意識による「抑圧」の少なくとも一因には、二郎の低視力に対する悩みがあるのではないかと推測される。その理由は以下の通りである。

まず、本章第一節で既に示した要約箇所を参照しつつ、墜落の夢のシーンに振り返ってみてみよう。このシーンからは、二郎の飛行願望、そして低視力の悩みからその飛行願望が否定される場面が確認できるからである。この夢の中で「二郎」は最初、眼鏡を掛けずに飛行機に乗り、飛行を楽しんでいた。しかし、上空にツェッペリンを見つけた「二郎」がゴーグルを掛けると、「二郎」の顔に眼鏡まで一緒に掛かり視界が歪む。そして、「二郎」は力強くそれらを引き外そうとするが、眼鏡だけは顔にへばり付き決して取ることができない。そうしてもがいている内に、「爆弾虫」に直撃した「二郎」は、粉々に砕かれた飛行機と共に墜

落していく。この場面から推測されることは、二郎は、少なくとも無意識において、低視力により飛行願望が叶わないことを知っている、ということだろう。このことから、二郎が抱える低視力に対する悩みは、二郎の飛行願望を「抑圧」しうるのだと考えられる。

対して、墜落の夢のつぎの夢、夢の王国①に現れ「美しい夢」を語るカプローニは、二郎にとって飛行願望が「抑圧」される願望であると考えられるのに反して、飛行願望を剝き出しにしている。それは、まず、夢の王国①の冒頭で飛行機に乗って飛んでいるのが、「二郎」ではなくカプローニであるということが示している。カプローニはこの後に、「私は飛行機を作る人間だ。設計家だ」と言うことになる。しかし、「飛行機を作る」ことだけがカプローニの目的であれば、このとき飛行機に乗っているのは必要のないことであり、不自然である。このことから考えられるのは、カプローニにとって「飛行機を作る」ことは第一義ではなく、飛行機に乗ることまでを目的にしているのではないかということである。

その証拠に、たとえば、夢の王国①では、カプローニは自らCa.48に乗り込み飛行する。また、「100人の客を乗せて大西洋を横断するのだ」という台詞によって、明らかに飛行機を作ることとは別に飛行するという目標が語られる。さらに、後に分析することになる引退飛行の夢においては、「引退飛行」と称してカプローニはCa.90に乗って飛行することになる。ここで重要なことは、カプローニが「引退」と位置付けているものが、設計ではなく「飛行」であるということである。くわえて、その夢の中では実際に、「空を飛びたいという人類の夢は……」と、人類の普遍的な願望としつつもその口から確かに飛行願望について言及もすることになる。これらのことから、カプローニの目的は、飛行機を作ることにとどまらず、その飛行機に乗って飛行することまでを含んでいることが分かる。

このように飛行願望を持つカプローニが、「人間」の笑顔と共に飛行したいという願望を露わにするわけである。飛行機で「人間」を笑顔にし、その姿を見るためには、多くの場合、飛行しなければ物理的に不可能である。そのため、二郎にとって飛行願望が「抑圧」される願望である限り、「人間」の笑顔と共に飛行したいという願望もまた、低視力への悩みによって「抑圧」される願望なのではないかと推測できる。

しかし、この推測だけでは不充分かもしれない。というのも、飛行機に乗って、ではなく、「人間」を笑顔にしたいという願望自体は、飛行願望とは関係がないとみなすことも可能だからである。けれども、墜落の夢の際に、二郎の低視力への悩みが否定したものは飛行願望だけではなかったとすればどうか。墜落の夢の中の「二郎」は、飛行機に乗りながら、大勢の女性達の笑顔を見て手を振っていた。このことから、「人間」を笑顔にしたいという願望が、カプローニの登場以前から既に存在していたとも考えられる。そして、その直後にツェッペリンが現れ、顔に眼鏡が掛かり、「二郎」は墜落したのである。つまり、「二郎」が低視力を原因に墜落することによって、「人間」を笑顔にしたいという願望も同時に否定されているとも考えられる。

以上のことから、二郎の抱えていた低視力に対する悩みは、飛行願望、そして「人間」を笑顔にしたいという願望の両方を「抑圧」しうるのだと推測できる。そして、二郎が墜落の夢のとき、低視力の悩みから無意識的に否定したとみられるこの二つの願望は、夢の王国①からは、カプローニが持つ願望となって表れている。したがって、以上の推測を踏まえた場合、カプローニの願望（二郎の無意識的な願望である「美しい夢」）が、二郎において「抑圧」される願望であることの理由が説明できるだろう。

3.5. 二郎が無意識的に持つ「人間」を笑顔にしたいという願望

さて、二郎の無意識が「美しい夢」を「抑圧」する理由はともかくとしても、先ほど後回しにしていた仮定の裏付けを本節では試みよう。その仮定とは、二郎は無意識的には、「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔にしたい、という願望をもっているのだという仮定である。このことは、現実世界におけるつぎのシーンから裏付けることが可能である。映画内の時系列では先取りする形となるが、ここではそのシーンをみておこう。

大学を卒業し三菱の設計士になった二郎は、夜遅くに会社から宿舎へ帰る途中に、ある光景を目にする。お腹を空かせた三人の姉弟が母親の帰りを待っていたのである。二郎は、その姉弟に買ったばかりのシベリアを与えようとする。しかし、姉弟はそれを受け取らずに二郎のもとから逃げて行ってしまう。宿舎に帰った二郎は本庄にそのときの話をする。話を聞いた本庄が「それは偽善だ。お前、その娘がにっこりして礼でも言ってくれると思ったのか」と言うと、二郎は「違う」と語気を強めて反射的な早さで否定する。が、すぐに「いや、そうかもしれない」と静かな声で認める。

このシーンにおいて、本庄自身が、特権階級にいる二郎の「偽善」を突いたことには間違いないだろう。しかし、今までの論考からすれば、二郎のこの反応に対して違う見方ができるのではないか。すなわち、ここで二郎が「違う」と即答するのは、自分の「偽善」を見抜かれたからではなく、「人間」を笑顔にしたいという無意識的、かつ「抑圧」された願望が言い当てられたからであると考えられる。このことについてもフロイトの論を参照しよう。フロイトは、「抑圧」される願望に対抗する「夢の検閲」について、つぎのように述べている。

> 検閲する側の意向とは、夢をみた人の目覚めている時の判断によって承認される意向であり、夢をみた人がこれこそ自分の考えだと感じ取っているような意向であります。もしみなさんが、自分の夢について正しく行われた解釈を拒否なさるとすれば、みなさんは、夢の検閲を行い、夢の歪曲を生ぜしめ、そのためにこそ解釈を必要とさせた動機と同じ動機からそれを拒否していることは確かなのです★34。

★34——ジグムント・フロイト、『精神分析入門(上)』、高橋義孝・下坂幸三訳、新潮文庫、1977年(原著1917年)、234頁。

これを踏まえて、二郎の本庄のやり取りをもう一度見てみよう。二郎は、「その娘がにっこりして礼でも言ってくれると思ったのか」という本庄の言葉に対して、すぐさま「違う」と強い口調で否定している。この反応が示していることは、二郎においては、「人間」の笑顔を見たいという願望が、「目覚めている時の判断によって承認される意向★35」ではない、また「これこそ自分の考えだと感じ取っているような意向★36」ではないということである。このことは、裏を返せば、二郎の無意識には、「人間」がどうであるかに拠る、「人間」を笑顔にしたいという願望があるということになるだろう。また裏を返せば、その無意識の願望は、同じ無意識によって「抑圧」される願望であることも分かる。

★35——同上、234頁。

★36——同上、234頁。

そして、「違う」と否定した二郎は、その後「いや、そうかもしれない」と言う。つまり、その願望を半ば認めつつ、半ば分からないこととして、二郎の意識は処理している。フロイトはまた、夢と夢を見る張本人との関係の前提として、つぎのように述べている

> 私がみなさんに言いたいのはつまり、夢をみた人はその夢がなにを意味し

ているかを知っているのだ、ただ自分が夢の意味を知っているということを知らないのであり、そのために自分が知らないということを信じているだけなのだということです★37。（傍点原文）

★37――同上、161頁。

このときの本庄が、期せずして二郎の夢（「美しい夢」）の意味を言い当てたと考えられるのに対して、二郎は「そうかもしれない」と答えている。この反応は、「自分が夢の意味を知っているということを知らない★38（傍点原文）」ということを示す反応だといえよう。したがって、このことからも、「人間」がどうであるかに基づく「人間」を笑顔にしたいという願望が、二郎の無意識に確かに存在するといえるだろう。

★38――同上、161頁。

であるならば、先の仮定、すなわち、「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔にしたいというカプローニが持つ願望が、二郎の無意識的な願望であるという仮定は、証明されたものと考えられる。もちろん、このシーンからは、飛行したいという部分は見いだせないが、いずれにしても「人間」の笑顔が核となり、「人間」がどうであるかが問題となっていることには変わりないからである。

3.6. 第3章のまとめ

本章を締め括るにあたって、本章の論考をつぎにまとめておこう。

まず、二郎の無意識的な願望は、夢のシーンに登場するカプローニの言動によって表されていると考えられる。二郎が無意識的な願望として抱いている「美しい夢」とは、「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔にしたい、という願望であろう。したがって、二郎の無意識が、飛行機について考えるときの基準は、飛行機に乗る「人間」がどうであるか、に置かれているのだと考えられる。

他方、二郎の意識は、自身の低視力に関する悩みからの「抑圧」があるためか、自分の無意識的な願望である「美しい夢」を意識することがない。それゆえ、二郎の意識は「美しい飛行機を作りたい」と願い、飛行機に乗る「人間」ではなく、飛行機自体に主眼を置いている。したがって、二郎が飛行機に対して意識的に持ち合わせている基準は、飛行機の形状、すなわち美／醜であると分かる。

「美しい夢」と「美しい飛行機」を隔てる、こうした意味の相違が持つ問題点は、それぞれの拠る基準が全く異次元に位置するということである。すなわち、「美しい飛行機」は、旅客機であれ、戦闘機であれ実現可能な願望である。したがって、もし、二郎の意識が「美しい飛行機」だけを追い続けるのであれば、無意識的に潜む「美しい夢」が拠るところの「人間」がどうであるかという問題は、無視され続けるだろう。

こうした点を踏まえ、次章では、続く夢のシーンの分析していくこととする。次章で分析する夢のシーンは、関東大震災時の白日夢とCa.60の試験飛行の白日夢、G.38の墜落の夢と引退飛行の夢、そして、映画のラストシーンである夢の王国②の五つのシーンである。

4. 無意識においてのみ思考される「人間」に関する問題

4.1. 関東大震災時の白日夢、Ca.60の試験飛行の白日夢分析

関東大震災時の白日夢のあらすじはつぎのようにまとめられる。関東大震災に遭遇した二郎は、足を骨折したお絹を背負い、大勢の群衆と共に線路を歩く。その最中、二郎は躓き、転ぶ。その際にふと、地震火災で燃え盛る街を見る。すると、その炎を反射して茜色に染まる雲の中に、突如、Ca.3とCa.4と思しき五機の飛行機が現れる。それに気が付いた二郎が「はっ」と空を見上げると、その飛行機の姿は既にない。

この白日夢において、まず確認できることは、このとき二郎が地震火災から、空襲の炎を連想しているということである。二郎はまず、地震火災を見てから、上空の茜色に染まった雲の中にCa.3とCa.4の姿を見ている。これらの飛行機は夢の王国①の冒頭に現れた爆撃機である。その際、二郎は、茜雲を背に飛び去っていくその爆撃機の姿を見て、さらに空襲によって燃え上がる街の光景を見ていた。したがって、二郎がこのとき、地震火災から空襲の火災を連想しているということが分かる。

しかし、重要なことは、このときの連想内容自体よりも、この連想が無意識に行われていることだろう。すなわち、二郎はこのときになぜ、無意識的に爆撃機の姿を見るのか、という点をここでは論じる必要があろう。ここで無意識にというのは、何よりもまずここで二郎がその爆撃機を見た（気がした）ことに「はっ」と驚いていることから分かる。また、夢の中で飛行機の破壊性を象徴する茜雲と同じ色の雲が、現実世界に現れた瞬間に合わせて、この爆撃機が連想されていることからも分かる。

無意識的に見ているということは、二郎が意識的に抱く「美しい飛行機」ではなく、二郎の無意識に潜む「美しい夢」という願望の方に、この白日夢は関係しているのだと考えられる。二郎の無意識が作りだしたカプローニは、夢の王国①の中で、飛行機を「戦争の道具」／「美しい夢」という、「人間」がどうであるかを基準に対比していた。そして、この白日夢では、「戦争の道具」であるCa.3とCa.4を二郎は無意識に見ているのだ。したがって、このときの二郎は、飛行機に乗る「人間」の問題を、無意識的に考えているのだといえる。換言すれば、この白日夢から見て取れることは、「人間」に関する問題が、二郎の意識的な問題ではなく、いかに無意識に属する問題であるかということである。そして、二郎が無意識の内では、飛行機が戦争の道具になり、震災時の街のような状況を作り出し得ることを知っているということも分かる。

関東大震災時の白日夢のつぎにみられる夢、Ca.60の試験飛行の白日夢はつぎのように要約できる。お絹と菜穂子の二人と別れた後、二郎は大学の前で本庄に会う。炎上する大学の建物を背に、二人が煙草を吸っていると、二郎の足元に、現実世界のジャンニ・カプローニとCa.60が描かれた絵葉書が飛んでくる。その絵葉書を拾い、眺めながら「本当に作ってしまったんだから、カプローニさんの夢は壮大だ。」と二郎が呟くと、シーンはCa.60の試験飛行の白日夢に突入する。白日夢の中では、カプローニが見守る中、Ca.60が湖から飛び立つ。が、すぐに翼から亀裂が入り、空中分解してしまう。一方、現実世界では強風が吹き火の勢いが増す。消火に必死になっている二郎に向かって、カプローニは夢の中から問いかける。「まだ風は吹いているか。日本の少年よ」。二郎は懸命に火の粉を払い

ながら「はい。大風が吹いています」と答える。それに対して、カプローニはまた夢の中から「では生きねばならん。Le vent selève, il faut tenter de vivre」と二郎を励ます。

ここでは、二郎が「カプローニさんの夢」に対して「美しい」という言葉を用いていないことに注意を払おう。カプローニにおいては、「夢」は「美しい」と表現されるべきものであった。にもかかわらず、二郎はこのとき「壮大だ」と言っている。このことからは、現実世界において、二郎が「美しい」という際に指し示すものが、飛行機に関することだけであるということが分かる。前章第三節では、二郎が現実世界において「美しい」と口にする三つの場面をあげ、実際に「美しい」という言葉は飛行機の形状についてしか用いられていないことを確認してある。したがって、この場面において、「夢」に「美しい」という言葉を用いないのは、二郎の意識においては「美しい」という言葉は飛行機の形状に関することだけを指す言葉として咀嚼されているからだといえる。

4.2. G.38の墜落の夢、引退飛行の夢（前半）分析

二郎は大学を卒業すると三菱重工業に入社し、飛行機の設計士として働くようになる。上司である黒川の推薦により、ドイツのデッソウのユンカース社へ視察に出かけた二郎は、ホテルで眠りながらG.38の墜落の夢を見る。この夢のシーンのあらすじはつぎのように要約できる。見渡す限りの雪原の中を二郎が歩いている。すると、二郎の歩く先の方に汽車が停まる。それに乗ろうと、二郎は急ぎ足で汽車に向かって歩いて行く。すると突如、カーキー色に塗装され翼に日の丸の描かれたG.38が、暗雲を突き抜けて墜落して来る。G.38が炎上、爆発し、ばらばらに砕けた破片となって周りに降り注いで来るのを、二郎は立ち止まって見ている。汽車が汽笛を鳴らすと二郎は、まだ細かい破片が降り止まぬ内に、汽車に向かって歩き出す。

この夢のシーンを分析する前に、現実世界においてG.38が登場するシーンを確認しておこう。二郎はこの夢を見る前、ドイツの飛行機工場の倉庫でG.38を既に見ている。その際、本庄の言う「爆撃機型を日本で作るんだ」という台詞によって、G.38がその後、二郎や本庄たちの手によって爆撃機に改造される予定だということが明らかにされている。その後、二郎は本庄と共に、飛び立ったG.38の展望室から景色を眺めたり、機関士の持ち場を訪れ見学したりする。工場視察の時点ではG.38はまだ旅客機である。つまり、二郎はこのとき旅客機を爆撃機に改造する立場にいることが確認できる。また歴史上においても、G.38は、フーゴー・ユンカースによって長年の研究がなされていた大型旅客機であった[★39]。しかしその後、三菱が「製造権を購入して爆撃機型に改造した[★40]」飛行機でもある。

以上のことを踏まえてG.38の墜落の夢の分析に入ろう。この夢では、昼間に二郎が旅客機として見て、乗っていたG.38が、爆撃機として姿を変え、炎上し、墜落している。というよりは、二郎の無意識が、旅客機であったG.38が爆撃機に変容し、墜落するという光景を予見しているともいえよう。この光景は、飛行機が「人間」を不幸にするということを意味するものであり、したがって「美しい夢」とは正反対の光景である。つまり、ここでの二郎の無意識は、飛行機に乗る「人間」の問題と向き合っており、飛行機が戦争の道具となった場合の行く末まで知っているのだといえる。

他方、夢の中における「二郎」はこの光景をどう見ているか。前章第三節では、夢の中の「二郎」は、二郎の意識と比較的近しい存在なのではないかと想定した。

★39——スタジオジブリ編集、前掲書、135頁。

★40——宮崎駿『風立ちぬ 宮崎駿の妄想カムバック』、大日本絵画、2015年、66頁に掲載されている飛行機の解説欄を引用した。

ここでは、それ検証する意味でも、その想定にしたがって「二郎」をみていこう。まず、「二郎」は、G.38の墜落を確かに立ち止まって見ている。しかし、汽車が汽笛を鳴らすと、「二郎」は、まだ破片の雨が降り止まぬうちに振り返り、その場から立ち去って行ってしまう。この「二郎」の行動から、「二郎」はここで直面している「人間」の問題を、問題として捉えていないように考えられる。繰り返すことになるが、このとき堕ちてきているのは、自分たちの手で爆撃機の姿に改造されることになる飛行機の末路である。であるにもかかわらず、「二郎」は墜落の場から立ち去って行く。したがって、この「二郎」が、「美しい飛行機を作りたい」という二郎の意識と近しい存在なのであれば、このシーンが物語るものは、美／醜だけを基準にして飛行機のことを考えたとき、「人間」の問題がいかに関知されないか、であろう。

ともあれ、このシーンでは、二郎の無意識がG.38の墜落を予見するという形で、飛行機に乗る「人間」の問題と向き合っているということ、換言すれば、二郎は無意識では、自分たちが改造するG.38が悲劇的な運命を辿ることを知っている、ということを少なくとも確認できる。このG.38の墜落の夢のあと、一度現実世界に画面は切り替わるが、すぐにG.38の墜落の夢の延長であると思われる★41引退飛行の夢へとシーンは戻っていく。引退飛行の夢（前半）はつぎのようにまとめられる（この夢のシーンは、台詞を中心に分析していくため、台本型で要約する）。

★41——G.38の墜落の夢の終盤に二郎が乗ろうとしていた汽車に、引退飛行の夢のはじめに二郎が乗っていることから分かる。

汽車に乗っている二郎の隣に、突如カプローニが現れる。カプローニは二郎を「引退飛行」に誘い、汽車の外に連れ出す。汽車の外には、大勢の人たちを満載したCa.90が二郎を待ち構えている。既にその飛行機に乗り込んでいたカプローニは、二郎を促す。

カプローニ　「早く乗りたまえ。飛ぶぞ。下だ。下の方に出入り口がある。急げ」

二郎がその飛行機に乗り込むと、飛行機は飛び立つ。Ca.90の機内では、老若男女問わず、多様で大勢の人々が、全員笑顔ではしゃぎ、飛行を楽しんでいる。カプローニは、そこにいる人たちについて二郎に説明をする。

カプローニ　「みんな職工の家族や親戚たちだ。まぁ村中だな。但し当局には秘密だ。何しろ納品前の爆撃機だからな」

飛行機が完全に飛び上がると、二郎とカプローニは飛行機の上に顔を出す。そして、カプローニは二郎に問う。

カプローニ　「どうかね」

その飛行機の全貌をみて二郎は答える。

二郎　「壮大です。古代ローマの建築物のようです」

カプローニ　「まあ、当局のハッタリ好きに付け込んだんだ。こんなものは戦争には使えんよ」

この場面において、カプローニが取っている行動は、二郎の無意識的な願望である「美しい夢」を表していると考えて間違いないだろう。まず、カプローニは、Ca.90を当局の要請で作ったにもかかわらず、「戦争には使えない」飛行機を作ったと語っている。「戦争には使えない」代わりに、カプローニは「職工の家族や親戚たち」を乗せているのだ。ここで飛行機に乗っている大勢の「人間」は全員、はしゃぎながら笑って、飛行を楽しんでいる。その様子は、夢の王国①の中でカプローニが「美しい」と表現したCa.60に乗る人たちと同様である。また、そのシーンの中で「これは私の夢だ」と表現していた「爆弾の代わりにお客を乗せる」

ことを、カプローニはここで、爆撃機を旅客機として用いることで実地に移している。つまり、カプローニはここで、飛行機に乗る「人間」がどうであるかを基準に考えたとき、爆撃機から旅客機へという、正反対の飛行機の使い方を意図的に行い「美しい夢」を叶えているのだといえよう。

また、この夢がG.38の墜落の夢の続きであると思われる点も考慮しよう。G.38の場合、旅客機が爆撃機に変わった姿を、二郎の無意識は予見していた。対して、このときのCa.90はその逆をいっている。要するに、G.38とCa.90は、「人間」を基準にしたとき対比関係にあるのだ。これらのことからは、二郎の無意識が、いかに「人間」の問題を重視しているかが分かる。

他方、このときの「二郎」はどうか。先の想定に乗っ取って見てみよう。このときの「二郎」は、Ca.90に乗ってはしゃぐ「人間」を確かに見ている。見ているのではあるが、しかし「二郎」が実質的に「見」ているのは、その「人間」ではないかもしれない。というのも、「二郎」がこのシーンで「壮大です。古代ローマの建築物のようです」と言って感嘆しているのは、飛行機の全貌を見たときである。したがって、このシーンからも、現実世界の二郎と「二郎」には、飽くまでも飛行機自体に関心を向けているという点で、想定通りの共通点が見いだせる。

4.3. 引退飛行の夢（後半）分析

引退飛行の夢（後半）はつぎのように要約できる（このシーンは台詞を中心に分析するため台本型で要約する）。

「引退飛行」の最中、二人は飛行機の翼の上に移動する。それと同時に空は茜雲に覆われる。すると、カプローニは突然、二郎に質問をする。

カプローニ　「君はピラミッドのある世界とない世界とどちらが好きかね」

二郎　「ピラミッドですか」

カプローニ　「空を飛びたいという人類の夢は呪われた夢でもある。飛行機は殺戮と破壊の道具になる宿命を背負っているのだ」

二郎　「はい」

カプローニ　「それでも私はピラミッドのある世界を選んだ。君はどちらを選ね」

二郎　「僕は美しい飛行機を作りたいと思っています」

カプローニ　「あれかね」

二人が振り返ると、どこからともなく白い紙飛行機のような飛行物体、「白いとり★42」が現れる。

カプローニ　「うむ、いい感じだ」

二郎　「いいえ、まだまだです。エンジンもコックピットすら形になっていません」二郎は「白いとり」を、紙飛行機を飛ばすように空に送り出す。遠くへ飛んでいくその「白いとり」を見ながらカプローニは言う。

カプローニ　「ブラボー。美しい夢だ。私はこの飛行を最後に引退する。創造的人生の持ち時間は十年だ。芸術かも設計家も同じだ。君の十年を力を尽くして生きなさい」

このシーンからはじめに確認できることは、ここでのカプローニの発言内が、

★42――宮崎駿『スタジオジブリ絵コンテ全集19 風立ちぬ』、徳間書店、2013年、306頁において、ここで登場する白い飛行物体は「白いとり」と記されていることから、本論でもこの飛行物体を以後、「白いとり」と表記する。

夢の王国①での発言内容から変化しているということだ。夢の王国①では「飛行機は戦争の道具でも商売の手立てでもないのだ。飛行機は美しい夢だ」とカプローニは言っていた。対して、ここでは「空を飛びたいという人類の夢は呪われた夢でもある。飛行機は殺戮と破壊の道具になる宿命を背負っているのだ」と言う。これまで本論が用いてきた言葉に置き換えると、夢の王国①においてカプローニは、飛行機は「人間」を不幸するものではなく、「人間」を笑顔にするものであると断言した。それが、このシーンにおいては、飛行機は「人間」を不幸にすることもあると変化していることになる。

したがって、この時点からは「美しい夢」の意味は修正されなければならないだろう。すなわち、この時点からは、カプローニが「美しい夢」というとき、同時に「呪われた夢」という意味が含まれるということである。反対に、「呪われた夢」と言うときは「美しい夢」という意味を含んでいるということになる。つまり、カプローニはこれまで、「人間」の笑顔を伴う飛行と、そうではない飛行とを分類し、そのうちの笑顔を伴う飛行を「美しい夢」と呼んでいた。しかし、この時点ではその分類はないに等しい。すなわち、カプローニにおいては、「美しい夢」はもはや一義的な「夢」ではなく、両義的な「夢」へと変化したといえる。

この変化はなぜ起こったのであろうか。カプローニのこうした変化は、一見、支離滅裂なようにも見える。しかし、まずカプローニの今までの言動を振り返ってみるだけでも、カプローニがみせたこの変化は筋が通っていることが分かる。というのも、夢の王国①においてカプローニが、「飛行機は戦争の道具でも商売の手立てでもない」と言ったのには根拠があった。それは、「だが、戦争はじき終わる」ということである。夢の王国①の時期が、第一次世界大戦末期であろうことは、第三章第一節で既に確認した。

一方、引退飛行の夢の際、カプローニは当局から爆撃機の発注を受けている。それでもカプローニは、「納品前の爆撃機」に笑顔を浮かべる大勢の「人間」を乗せて、「引退飛行」を楽しんだ。しかし、皮肉にもこのことが、飛行機が「人間」を笑顔にも、不幸にもし得る両義的なものであることを証明している。なぜなら、Ca.90に乗って飛行を楽しむ大勢の人たちの姿が、いつ、無数の爆弾となって姿を変えるか、それは紙一重だからである。というのも、この時点において、Ca.90は「戦争には使えない」と言われながらも「納品前の爆撃機」であることに変わりがない（歴史上、その後、軍から不採用とされるわけではあるが★43）。したがって、このときのカプローニは、飛行機は戦争の道具ではないといえる根拠を既に喪失しているのだと分かる。そう考えると、「美しい夢」の意味が両義的なものに変化したからといって不自然なことはない。

しかし、また、根本的な問題として、カプローニは二郎本人から独立して存在しているわけではない。飽くまでも二郎の無意識的な願望を表す存在として、二郎の夢の中にその姿を現しているだけである。したがって、カプローニがここでCa.90という爆撃機を作ったという光景も、元を辿れば、現実世界における二郎が見たもの、聞いたものから出来上がっているはずである。そして、カプローニの言う「美しい夢」の意味が変わったのも、現実世界における二郎の体験を通して変わっているのだと考えられる。ここでは、現実世界において二郎が体験した物事から、この変化の原因を考えておこう。

二郎の無意識的な願望である「美しい夢」の意味が変更されたことは、現実世界における二郎が体験した、つぎの三つのことが主な原因であると考えられる。一つ目は、二郎が三菱に入ってから取り付け金具の設計を担当した飛行機、隼で

★43――ニュータイプ編、スタジオジブリ監修『風立ちぬビジュアルガイド』、角川書店、2013年、57頁。

ある。隼が試験飛行で墜落した際、黒川が「陸軍は既に戦闘機は他の社にすると内定している」と口にすることでも明示されるように、隼は戦闘機である。つまり、この時点で既に、二郎の無意識を表すカプローニは「飛行機は戦争の道具で」はないとは言えない。二つ目は、既に確認したG.38である。現実世界における二郎は、G.38を旅客機から爆撃機へと改造する立場にあった。三つ目は、ドイツの夜道で、二郎が本庄と散歩をしているときに見た光景、すなわち秘密警察らしき人物たちが少年を追いかけている光景である。二郎と本庄がこの光景に出会う直前までは、道沿いの民家では窓を開け放して、レコードが掛けられていた。しかし、二人がこの光景を見終わった後では、その民家の窓は閉じ切られ、レコードは止められていた。つまり、ここでは戦争へと向かう不穏な雰囲気が描かれているのである。現実世界の二郎が経験した、これらの三つのことが、二郎の無意識における「美しい夢」の意味が変わったことの主な原因になっていると考えられる。

こうして「美しい夢」の意味が変更されたとはいえ、二郎の無意識を表すカプローニが、飽くまでも「人間」を基準にしていることに変わりはない。というよりむしろ、飛行機が「人間」にもたらす影響を考えているからこそ、カプローニの言う「美しい夢」の意味は変わったのである。つまり、ここで「美しい夢」の意味が変わったのは、「戦争の道具」（「人間」に不幸を招く飛行）という「美しい夢」（「人間」の笑顔を伴う飛行）の対局に位置していたはずの両者が、ここに至っては表裏一体のものであるということを認めざるを得なかったからに過ぎない。

そうすると、カプローニが、後に、九試単座として戦闘機に姿を変えることになる二郎の「白いとり」に向かって「美しい夢だ」と言うことに、今までの議論との矛盾はない。なぜなら、繰り返しになるが、ここで発せられた「美しい夢」は、「呪われた夢」という意味を併せ持つ両義的な意味を持っているからである。

さて、ここまでは、「人間」を基準するカプローニが、現実世界における政治情勢の変化に伴って、飛行機に対して両義的な認識を持つようになったことは分かった。他方、この夢の中の「二郎」はどうか。夢の王国①において、目を覚ました二郎が「美しい飛行機を作りたい」と願ったとき、カプローニは「飛行機は戦争の道具でも、商売の手立てでもないのだ」とし、一義的な意味で「美しい夢だ」と言っていた。対して、このシーンにおいてカプローニは、「空を飛びたいという人類の夢は呪われた夢でもある」と、飛行機は両義的なものであると言っている。つまり、夢の王国①とこの場面とでは条件が変わっているわけである。その変化した条件を突き出して、カプローニは「君はどちらを選ぶね」と「二郎」に問い、選択の機会を与える。

その問いに対して「二郎」は、「美しい飛行機を作りたいと思っています」と、夢の王国①の際と全く同じ答えを出す。このことを考えると、「人間」に関する問題は、「二郎」にとっては条件でさえないのかもしれない。つまり、ここでは「美しい飛行機を作りたい」という願望が、いかに「人間」の問題とは別次元に位置する願望であるかが示されているといえる。

そして、「二郎」がこのときに言う「美しい飛行機を作りたい」という台詞は、現実世界で二郎が言った台詞と全く同じである。したがって、以上の夢の中における「二郎」の返答に対する考察は、そのまま現実世界の二郎に当てはめて考えることができる。すなわち、このときの「二郎」の返答が意味することは、現実世界の二郎が「美しい飛行機」を追い求めるとき、それが旅客機でも戦闘機でも「美しい飛行機」には変わりがない。そのため、「人間」の問題を無意識の内に留めている限り、二郎は飛行機を作り続けるということである。

4.4. 夢の王国②分析

引退飛行の夢から十年以上の歳月が流れ、時は戦後になる。そして、二郎は夢の王国②においてカプローニと再会する。映画のラストシーンにあたるこの夢のシーンはつぎのように要約できる。戦後、山のように積もった飛行機の残骸の中、二郎が草原を歩く。丘に登った二郎は、カプローニと再会する。カプローニは「やぁ、来たな。日本の少年」と二郎を迎える。二郎が「ここは私たちが最初にお会いした草原ですね」と言うと「我々の夢の王国だ」とカプローニが答える。それを聞いた二郎は「地獄かと思いました。」と言うと、カプローニは「ちょっと違うが同じようなものかな」とまた答える。その後、カプローニが「あれだね、君のゼロは」と言って横を向く。その視線の先から、編制を組んだ十二機の零戦が登場し、空高くに無数に飛ぶ飛行機の影の群れの中に混じって行く。その光景を見て、カプローニは「美しいな。いい仕事だ。」と言うが、二郎は「一機も戻ってきませんでした。」と呟く。それに対し、カプローニは「ゆきて帰りしものなし。飛行機は美しくも呪われた夢だ。大空は皆飲み込んでしまう」と言い、突然、「君を待っていた人がいる」と切り出す。すると、二人から遠く離れた場所に日傘を差した菜穂子が現れる。菜穂子は「あなた、生きて、生きて」と二郎に告げて、笑みを浮かべながら、空に舞い消える。それを見ていたカプローニは、「行ってしまったな。美しい風のような人だ」と言う。いなくなった菜穂子に対して二郎は、「ありがとう。ありがとう」と返す。

このシーンでは、二郎が飛行機を作り続けた帰結が描かれている。ここでは、カプローニが零戦に向かって「美しい」と言う。カプローニが「美しい」という言葉を両義的な意味で用いるようになったことは前述した通りである。実際、カプローニはそのことをつぎのように繰り返し言っている。「ゆきて帰りしものなし。飛行機は美しくも呪われた夢だ」。したがって、ここで口にされる「美しい」の意味も両義的な意味合いを含んでいると考えられる。

だが、さらに重要なことは、カプローニがもう一度、「美しい」という言葉を使う場面から見て取れる。その場面とは、菜穂子に向かって「美しい風のような人だ」と言うときである。この「美しい」の意味は、零戦に向かって発せられた両義的な意味とは異なるだろう。というのも、両義的な意味に変化した後の「美しい夢」は、少なくとも、空を飛ぶということに関係していた。けれども、この場合はそうではない。したがって、ここでのカプローニは、笑みを浮かべて消えていった「人間」（菜穂子）に対して純粋な意味で、「美しい」と言っているのだと思われる。つまり、「人間」の笑顔を「美しい」と言った、夢の王国①のときと同じ意味であろう。

そして、この「美しい」という言葉が、夢の中において、また「二郎」ではなくカプローニの口から発せられたということの意味は大きい。夢の中での「二郎」は、飛行機を「見」て、飛行機自体を「美しい」と言っている点、そして「美しい飛行機を作りたい」と言っている点で、現実世界の二郎の意識に近しい存在であろうことは、今まで見てきたとおりである。対して、カプローニは、その「二郎」とは違い、二郎の無意識的な願望を表す人物であろうことも繰り返し述べてきた。そうすると、この夢の中で、カプローニが「美しい」と言ったということは、二郎が無意識的には菜穂子のことを「美しい」と思っていたということを意味するだろう。ここで、無意識的に、ということを強調するのは、現実世界における二郎が菜穂子に対して「美しい」と言ったことは一度もないからである。菜穂子は、現実世界において、カストルプと黒川夫人の二人から「美しい」と形容

されていた。であるにもかかわらず、二郎は、菜穂子に対して「綺麗だ」とは幾度も言うものの、「美しい」と言ったことは一度もない。このことは、単に、二郎の無意識における「美しい」と、意識における「美しい」の、指すものの違いを意味しているだけではないだろう。

つまり、二郎は「人間」（菜穂子）に対して「美しい」と意識することを無意識的に避けていた、ということが示唆されているだろう。というのは、逆にいうならば、二郎は菜穂子のことを「綺麗だ」とは何度も言っていたのである。ということは、「美しい」と言えない理由は、通常であればないはずである。であるにもかかわらず、二郎は「美しい」とは言わなかった。そうすると、言わなかったのではなく、言えなかったのだと考えることができる。したがって、このカプローニの口から発せられた「美しい」という言葉は、つぎのことを意味するだろう。すなわち、二郎の無意識においては、「人間」を「美しい」とは意識させまいとする意向、つまり、「抑圧」する側の意向も存在していた、ということである。

4.5. 少年期と夢の強固な関係

以上、全七つの夢のシーンを分析してきた。結論に向かう前に、二郎の少年期と夢の関係について、主に本映画の制作過程から確認しておきたい。というのも、本論では、第三章において、主に二郎が少年時代に見た夢のシーン分析から二郎の意識と無意識の区別を明らかにした。そして本章においては、第三章で明らかにした事柄を踏まえつつ、二郎が大人になってから見た夢のシーン分析してきた。その結果、「美しい夢」の意味の変更点は認められたものの、本筋である、無意識が拠る「人間」、意識が拠る飛行機自体、という関係については終始変わらなかったとみなすことができる。であるならば、二郎が「人間」に関する問題や「人間」を「美しい」とすることを意識しなくなるという状況は、少年期にほぼ決定づけられていたということになる。また、二郎は、少年期に抱えた低視力に対する悩みから、「美しい夢」を無意識に「抑圧」するようになったのではないか、という推測も第三章第四節では導き出した。これらのことからすると、二郎の少年期と夢（無意識）との関係は、極めて強いということになる。ここでは、その点について主に制作過程における情報から確認し、本論を補強していくこととする。

まず、この映画の企画案から、二郎の少年期と夢の関係の強さが分かる。この映画の制作以前に検討された企画案は、つぎの二つだった。一つ目は「原作漫画には無かった、主人公二郎とヒロイン菜穂子の関東大震災での出会いというアイデアと共に、最終的な映画作品とほぼ同じA案[★44]」である。そして二つ目は、「青年期以降にストーリーを絞り夢のシーンも出てこないB案[★45]」である。この際、不採用となったとみられるB案が示していることは、少年期が描かれなかった場合、夢のシーンも描かれなかったということである。あるいは、夢のシーンが登場しない場合は、二郎の少年時代は描かれなかったということである。いずれにしても、少年期と夢の関係は切っても切り離せないほど強いということが分かる。

この少年期と夢の関係は、作中においては、カプローニが言う「日本の少年」という呼称によって示唆されているだろう。カプローニは、二郎のことを「日本の少年」という呼称以外では呼ばない。二郎が大学生のとき（Ca.60の試験飛行の白日夢）と二郎が飛行機設計士として零戦を作り終えたとき（夢の王国②）という、二郎が大人になった以降のシーンにおいてもカプローニは二郎を「日本の少年」としか呼ばないのである。このことを単純に、二郎がカプローニと出会ったときに「日本の少年です」と名乗ったからであるといって、論じてしまうことは容易

★44——宮崎駿、前掲書の付録小冊子に掲載された記事（スタジオジブリ「「風立ちぬ」への道」）、10頁。

★45——同上、10頁。

である。けれども、本作では、二郎と菜穂子の間の関係の変化を、呼び方の変化という形でも示されていた。すなわち、「菜穂子さん」と「二郎さん」だった互いの呼び方が、後に「菜穂子」と「あなた」に変化し、二人の関係が近づいたことが表現されていたのである。このことを踏まえれば、カプローニが二郎に対して「日本の少年」としか呼ばないことは、カプローニと二郎の関係が、二郎の少年期から変化していないということを示すものだと考えることができる。

また、二郎が「美しい夢」を意識しない原因には、二郎の低視力への悩みがあるのではないかという推測を、宮崎のつぎの発言は補強するだろう。本映画の準備段階であると思われる時期に★46、宮崎は次回作について、「やっぱり少年の悲劇性みたいなものを踏まえた映画でなければ、僕はやる必要ないんです。僕が出ていく必要がない★47」と発言している。ここで言われている人が、確実に二郎のことであるとすれば、この「少年の悲劇性★48」という発言には、二郎の低視力が当てはまるだろう。そして、宮崎がそれを映画の核に据えていることも伺える。

これらはいずれも、二郎の少年期と夢の関係の強さを示しているといえる。したがって、主に少年期における夢のシーンから二郎の意識と無意識を確認し、そして、その後もその関係は変わらないとしてきた本論は、以上の情報から補強されるだろう。

★46——宮崎駿『続・風の帰る場所　映画監督・宮崎駿はいかに始まり、いかに幕を引いたのか』、ロッキング・オン、2013年、89頁において、このインタビュー記事が雑誌『CUT』の2010年9月号に掲載されたものであると明記されていることから推測される。

★47——同上、133頁。

★48——同上、133頁。

結論

最後に、これまでの論考を以下にまとめて結論する。

まず、二郎は、「人間」の笑顔と共に飛行したい、あるいは「人間」を笑顔にしたい、という願望を無意識の内に抱いていた。しかし、「人間」がどうであるか、ということを基準にするその願望は、二郎にとって「抑圧」される願望であり、飽くまでも無意識的なものでしかなかった。そのため、現実世界における二郎は「美しい飛行機を作りたい」という飛行機の美／醜を基準とする願望を抱いていた。

そして、この二つの願望は、本来的に関係し合わない、別次元の願望であるため、現実世界の二郎が「美しい飛行機」のみを追い求めるとき、「人間」の問題は直接の障害にはならなかった。換言すれば、「美しい飛行機」だけ目指すならば、旅客機でも戦闘機でも、「人間」の問題を意識しない限り、実現可能だった。そして、二郎は、飛行機が戦争に使われた場合「人間」を不幸にすることを無意識の内には知っていたが、しかし、それは無意識においてのみだった。

したがって、戦争の時代において二郎が飛行機を作り続けた理由は、「美しい飛行機を作りたい」という願望を持つ現実世界の二郎においては、「人間」がどうであるか、という問題が意識されなかったからであると結論できる。その理由としては、二郎の無意識的な願望、すなわち「人間」を拠り所にした「美しい夢」は、二郎の無意識によって「抑圧」される願望であったということが考えられる。

最後に、本論の課題を述べて本論文を締め括ろう。本論では、夢に注目し、詳しくみることができた反面、その結果を用いて現実世界における二郎の行動を詳しく説明することにまで、充分に展開して論じることができなかった。また、宮崎がなぜ、2013年という時代に向けて、二郎を主人公にした映画を作るに至ったのかという問題も、つぎなる課題となろう。

参考文献一覧

荒井晴彦、西岡琢也、晏妮「映画『風立ちぬ』の中心と周縁 そこに顕れる問題諸々を突く」、『映画芸術』、2013年秋号445号、編集プロダクション映芸、2013年
安斎耕一「伝統壊す勇気を評価「風立ちぬ」意見二分　坂本龍一が語るベネチア映画祭」、『朝日新聞』文化芸能、2013年10月18日夕刊、朝日新聞社、3頁
井上真実「（声）若い世代　3本の映画で戦争を考えた」、『朝日新聞』オピニオン2、2013年9月7日朝刊、朝日新聞社、12頁
垣井道弘「SPECIAL REVIEW『風立ちぬ』鑑賞ガイド」、『キネマ旬報』、2013年8月上旬号No.1642、株式会社キネマ旬報、67-71頁
木下ゆう子「（声）宮崎アニメ「風立ちぬ」に感銘」、『朝日新聞』オピニオン2、2013年7月14日朝刊、朝日新聞社、8頁
スタジオジブリ責任編集『THE ART OF THE WIND RISES』、徳間書店、2013年
ニュータイプ編、スタジオジブリ監修『風立ちぬビジュアルガイド』、角川書店、2013年
半藤一利、宮崎駿『半藤一利と宮崎駿の腰ぬけ愛国談義』、文藝春秋、2013年
フロイト、ジグムント『精神分析入門（上）』、高橋義孝・下坂幸三訳、新潮文庫、1977年（原著1917年）
堀越二郎『零戦 その誕生と栄光の記録』、角川書店、2012年（原著1970年）
宮崎駿『風立ちぬ 宮崎駿の妄想カムバック』、大日本絵画、2015年
宮崎駿『スタジオジブリ絵コンテ全集19 風立ちぬ』、徳間書店、2013年
宮崎駿『続・風の帰る場所　映画監督・宮崎駿はいかに始まり、いかに幕を引いたのか』、ロッキング・オン、2013年
森直人「（プレミアムシート）「風立ちぬ」ちっぽけな人間、静かに肯定」、『朝日新聞』夕刊be金曜1面、2013年7月26日夕刊、朝日新聞社、4頁